

「つべつ学」論文 全道最高賞

津別高・平子教諭 探究授業テーマに



日本教育公務員弘済会北海道支部の役員から表彰状を受ける平子裕教諭(右)

まち活性化提言 小規模校だからできた

【津別】津別高(島村真幸校長、54人)の平子裕教諭(30)が、公益財団法人日本教育公務員弘済会北海道支部主催の本年度の「教育研究論文」個人部門で、最高賞の特選を受賞した。授業の「総合的な探究の時間」についての論文で、同校の地元探究授業「つべつ学」を深める取り組みが評価された。「学校ぐるみでいただいた賞。とてもうれしい」と喜ぶ。

生徒自ら町民と主体的に

同校は2019年度から「総合的な探究の時間」に、郷土学習「つべつ学」を導入。20年4月に着任した平子教諭も「つべつ学」に参画してきた。

3年間の「つべつ学」を通し、生徒たちは地元の歴史や行政、産業などを学ぶ。2年時には町などに対し政策提言している。ただ、提言の内容は「例えば若者を集めるため『遊ぶ施設がほしい』といった、現実感に欠ける内容もあった」(平子教諭)といい、人任せではなく生徒自身に何ができるかという視点をもっと持つべきではないかといった課題も校内外から指摘されていた。

22年度に1年生を担任した平子教諭は、生徒たちが2年生となった翌23年度の政策提言へ積極的に指導。その結果生徒たちは「高校生と町民が協力して空き家を改造し、ライブハウスを作る」「高校生が子ども向けに部

活体験会を開く」など実現性ある提言を出せるようになった。

「つべつ学」では3年時に集大成としての成果物作成を課しているが、例年はリポートやポスターといった「紙の成果物」が多かった。これに対し、平子教諭に学んだ24年度の3年生は「自分で実現できそうな範囲で役に立つ物を」と、国道沿いにある同校の古い案内看板を、津別の木材を使った手作り案内看板に更新した。

材料集めは生徒自身が依頼して森林組合から提供を受けたほか、町内の建設会社からも協力を取り付けた。また生徒らにアドバイスする北大公共政策大学院生らの団体「HALCC(ハルク)」の協力も大きな力となった。

11月21日に同校で行われた授賞式で、平子教諭は「まちの活性化に生徒たち自身が直接どう関われるか、この授業で学んでもらうことができた」と総括。看板作りで地域の人の関わりを深められたことも成果だったとし、「地域の課題に直接、主体的に関わることができるようなのは、実は津別高のような小規模校だからこそ。今後も地域と高校の関わりを大切にしたい」と話している。

(青山秀行)